４　次の文章はある論考の後半部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

〈新潟大〉二〇二〇年度出題

Ａ昨今、私たちはますます「待つ」機会が少なくなったと言われる。これは、交通機関や通信技術の発達とともに、過去に何度も繰り返されてきた指摘ではある。しかし、とりわけ携帯電話やインターネットが普及しはじめて以来、こうした論調はいっそう目につくようになったのではないだろうか。とはいえ、「待つ」ことは私たちが時間のなかに生きる存在である以上、どうあっても避けることのできないものである。ゆえに①ゲンミツに言えば、現代の交通網や通信事情は、私たちから「待つ」機会を奪ったのではない。それは、私たちの「待つ」という経験への向き合い方を決定的に変えたのである。

　どういうことか。いま述べたことを、清一が「前傾への強迫」と呼ぶものに即して考えてみたい。鷲田は、かつて現代の「労働」を分析する仕事を行なっていたとき、企業のさまざまな活動や業務に関わる文書にある共通の接頭辞がつけられていることに「した」という。それについて述べたのが次の文章である。

あるプロジェクトを立ち上げようと提案する。そのプロジェクトの内容を検討するにあたっては、そもそも利益の見込みがあるかどうか、あらかじめチェックしておかなければならない。なんとかいけそうだということになれば、計画に入る。計画が整えば、それに沿って生産体制に入る。途中で進捗状況をチェックする。支払いは約束手形で受ける。そしてけが出れば、企業は次の投資に向けてさらに前進する。事業を担当した者にはそのあと当然、昇進が待っている……。

　お気づきだろうか。なかにはすでにカタカナとして定着している言葉も少なくないが、ここに見られるキーワードはどれもこれも、「プロ」という接頭辞をもつ言葉ばかりなのだ。はじめの「プロジェクト」はもちろん、「利益（プロフィット）」「見込み（プロスペクト）」「計画（プログラム）」「進捗（プログレス）」そして「昇進（プロモーション）」にいたるまで、これらはみな、「前に」「先に」「あらかじめ」という接頭辞「プロ（pro-）」を伴う言葉ばかりである。鷲田はこれを適切にも「前傾への強迫」と呼び、次のような指摘を加える。

こうした前のめりの姿勢はだから、じつのところ、何も待ってはいない。未来と見えるものは現在という場所で想像された未来でしかない。未来はけっして何が起こるかわからない絶対の外部なのではない。その意味で、「プロ」に象徴される前のめりの姿勢は、じつは〈待つ〉ことを拒む構えなのである。／待つことには、偶然の（想定外の）働きに期待することが含まれている。それを先に囲い込んではならない。つまり、ひとはその外部にいかにみずから開きっぱなしにしておけるか、それが〈待つ〉には賭けられている。

　いま、私たちの社会を②オオい尽くしているもの――それこそ、まさにこの「前傾への強迫」にほかならない。③ガイゼン性の高いデータをもとに「あらかじめ」先を見通すことが推奨され、「やってみなければわからない」といったたぐいの不確かさはとことん④キヒされる。これは、交通網や通信技術の発達によって「待つ」時間が短くなったこととはまた異なる、より根本的な意識の変化ではないだろうか。

　こうしたを、私たちはいかに「耐える」ことができるだろうか。「耐える」とは、たんにそれが過ぎ去るのを待つことであるとはかぎらない。というのも、こうした状況が今後ますます広がっていくであろうことは、私たちの誰にとっても容易に想像しうることだからだ。よって、ここでの「耐える」という言葉は、必然的に「抵抗」のニュアンスを帯びることになる。先の引用で述べられていたように、おそらくそのひとつの道は、「偶然の」あるいは「想定外の」働きに期待するという、待つこと本来の姿勢に立ち返ることであると言えるだろう。しかしここでは、また別の道を考えてみたい。

　今日の社会が押し付けてくる時間の流れに対し、いかなる抵抗が可能か？　　このような問いを掲げた理論家や実践家は少なくないが、ここではそのひとりであるジャン＝フランソワ・リオタールの議論に耳を傾けてみたい。というのもリオタールは、20世紀後半の資本主義の発展によってますます加速する時間の流れに対し、私たち人間がいかに抵抗できるかを考えた哲学者だったからである。

　リオタールの議論の興味深いところは、資本主義をたんなる経済システムとしてではなく、「発展」というひとつのを体現するものとして捉えなおしている点にある。リオタールに倣って言えば、資本主義とは――おそらく私たちが想像するのとは異なった意味で――「非人間的な」ものである。なぜならそれは、本質的にはいかなる理念も、目的も必要とせず、ただ利潤を求め、その拡大のみをめざす非人称的なシステムだからである。その「発展」への傾きは、個々の人間が求めているようでいて、大局的に見ればそうではない。むろんそこに個々の意志は存在するにせよ、資本主義とは、あらゆるものに差異を見いだし、そこから価値や利潤を生み出していくという、終わりなき運動によって特徴づけられるものなのだ。

　そのことをもって、リオタールは資本主義の核心を、たんに金銭を「稼ぐ」ことではなく、むしろ時間を「稼ぐ」ことのうちに見いだそうとする（ちなみに、日本語のみならずでも、この「稼ぐ（gagner）」という動詞は両者どちらに対しても用いられる）。なぜそのように言えるのか。物やサービスの売買を通じて利潤を得るということは、その利潤を生み出しうる差異を「いち早く」発見し、それを金銭に変えるということだ。そのような意味で、資本主義においては「資本を稼ぐ」手前の段階に、「時間を稼ぐ」というより本質的な段階が存在するのである。

　そのような巨大なシステムを前に、個々の主体ができることとは何だろうか？　単純な話、発展のイデオロギーが時間を稼ぐことを最大の目的としているのなら、私たちにできるもっとも単純な「抵抗」とは、その発展の速度を緩めることであるだろう。資本主義がますます非人間的なものへと転じていくのなら、少なくともその「部分」をなす私たちに可能な抵抗とは、資本主義が強いる時間の流れに対して、別の「流れ」を見いだすこと以外にない。たとえば、その速度を緩めること――前世紀後半に盛んに唱えられるようになった「スロー」フードや「スロー」ライフといった標語は、こうした時代状況のなかから生まれてきたものである。

　しかし、即時性のもたらす⑤オンケイに慣らされた私たちは、もはやこうした時間の加速に抵抗する、という発想すら持ちえないかもしれない。それに、このような抵抗が、そこかしこで「スマートな」情報処理が全面化しつつある今日の社会において、どれほどの意味をもつのかしく思う向きもあるだろう。

　さらにな問題もある。先にその概要を見た資本主義の運動は、みずからに差し向けられた批判すらもその一部として取り込んでしまう。リオタールもまた、そのような危険を十分に察知していた。若かりし頃の活動について語ったあるインタビューのなかで、リオタールは次のようなエピソードを⑥ヒロウしている。

私はかつて〔アーティストの〕ブリュノ・ルムニュエルとともに、題名も著者名もない本を夢想したことがありました。しかし〔今思えば〕それは単純素朴な発想でした。そのような本が出版されたとしても、つまり出版社を得たとしても、価値法則はこのような対象を必ずやその周期中に引き込み、むしろそのような空白を持つという事実によって、そこから多くの価値を生じさせずにはおかないでしょう。そして、題名も著者名もないことが、この本を評判の高い消費対象にしてしまうでしょう。〔…〕資本主義経済は⑦トクメイ性それ自体を奪ってしまい、それをもって剰余価値の流用の一様態にしてしまうことすらあるのです。

　これはあくまでひとつの⑧ソウワにとどまるが、リオタールがここで示しているような認識は、おそらく正しい。「スローフード」や「スローライフ」といった言葉がそうであったように、資本主義の全面化にい、そこに一石を投じたり、速度を緩めたりする試みすら、Ｂ時によっては「新たな」価値観として、その内部へと容易に回収されてしまう。本家イタリアの「スローフード」思想がそのような内容に尽きるとは言えないが、少なくともそれが「新しい」文化として先進諸国に紹介されたとき、結果としてそれが一定以上の所得をもつ人々へと向けられた、新たな経済圏の創出と結びついていたことは思い出されてよい。一時期、雑誌をはじめとする各種メディアをわせた「スローライフ」という標語も、やはりそうした矛盾に直面せずにはいなかった。生活を「スロー」にすることが可能なのは、十分な可処分時間と可処分所得をもつ一部の人々にかぎられる。そのようなライフスタイルに結びついた新種の情報や商品の提供によって、資本主義そのものはますます拡大していく。これが矛盾でなくて何であろうか。

　世俗的な時間のなかに生きるかぎり、私たちはこの「前傾への強迫」と「資本主義の時間」から完全に無縁であることはできない。寺院や修道院のような、かつてであれば世俗から切り離されていたはずの空間ですら、今日ではこうした世俗の諸事と何がしかの関わりをもつのが常である。それならばせめて、そこに完全に飲み込まれないようにするために、Ｃ私たち一人ひとりがみずからの身体を作り変えねばならない――あらゆる行為の起点である「この」身体を。

　本稿を始めるにあたり私たちが確認したのは、「待つ」ということが、おそらく能動的とも受動的とも言いがたい、いくぶん奇妙な様相のもとにあるということだった。それは通常イメージされるような、主体的な意志に根ざした「行為」ではない。しかし他方で、何かを待っている人が、そのとき何もしていないわけではもちろんない。何かを待っているとき、そこでは必ず何かが起こっている。「予兆」や「先触れ」という曖昧な言葉でしか名指すことのできないそれを、けっして手放さないこと――つまるところ、問題はこれに尽きている。「待つ」というのは、主体性という点では明らかに「弱い」動詞である。しかしこの「弱さ」は、重要性が欠けていることを示す指標ではけっしてない。なぜなら「待つ」ことは、時間のなかに生きる存在である私たちが、けっしてやめることのできないものだからである。

　先述した「前傾への強迫」以外にも、「待つ」ことの軽視は、今日の社会のいたるところに見いだされよう。「主体的（能動的）であれ」という声かけはそれ自体としてはもっともな⑨ソクメンもあるが、Ｄそれが全面化したときに失われるものに、人はしばしば無自覚である。たとえば昨今の教育現場で推奨されている「アクティヴ・ラーニング」といったものに顕著だが、その陰で失われつつあるのは、時にみずからの理解を超えた他者の話にじっくり耳を傾け、いつかそれが理解できる「かも」しれないという期待に胸を⑩フクらませる、待機の時間ではないだろうか。誰もが経験的に知るように、いっけん受動的に見える読書や観劇のあいだにも、積極的な「何か」はつねに生じている。そこで観客は、ほかならぬ「読む」「見る」という行為を通じて、つねにその作品を解釈しつつ、それをみずからの次なる行為へつなげていく。それが能動的な行為でなくて何であろうか？　いっけん「インタラクティヴ」には見えない、ただ「黙って聞く」だけの講義の時間のなかにも、本来そうした「待つ」ことのが顕著に見いだされるはずである。

（星野　太「待つ・耐える」による）

問１　傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問２　傍線部Ａ「昨今、私たちはますます『待つ』機会が少なくなったと言われる」とあるが、それについて筆者はどのように考えているか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問３　傍線部Ｂ「時によっては『新たな』価値観として、その内部へと容易に回収されてしまう」とはどういうことか。本文に即して百二十字以内で説明せよ。

◎問４　傍線部Ｃ「私たち一人ひとりがみずからの身体を作り変えねばならない」とあるが、「みずからの身体」をどういう状態からどういう状態に「作り変え」るということか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問５　傍線部Ｄ「それが全面化したときに失われるもの」とあるが、「失われるもの」とは何か。本文に即して四十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝厳密　　②＝覆　　　③＝蓋然　　④＝忌避　　⑤＝恩恵

　　　⑥＝披露　　⑦＝匿名　　⑧＝挿話　　⑨＝側面　　⑩＝膨

問２　Ａ人は時間の中に生きる存在である以上、「待つ」ことは避けられないが、Ｂ現代の社会情勢では先を見通すことが推奨されるため、Ｃ不確かな未来に期待を持つという、「待つ」ことの本来的なあり方が失われた。（94字）

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔「人は時間の中に生きる存在」の内容がなければ０。〕

Ｂ＝３〔「前傾への強迫」の内容についての説明があれば可。〕

Ｃ＝４〔「不確かな未来に期待を持つ」の内容がなければ０。「偶然の（想定外の）働きに期待する」などの表現も可。〕

問３　Ａ資本主義とは、あらゆるものにいち早く差異を見いだし、Ｂ価値や利潤を生み出すシステムであるため、そのＣ資本主義に抵抗する試みさえも、図らずも新しさゆえに価値が生じ、Ｄ新たな経済圏の創出と結びついて資本主義を拡大させる結果に終わるということ。（116字）

Ｄがなければ全体０。

Ａ＝２〔「時間を稼ぐ」の内容についての説明があれば可。〕

Ｂ＝２〔「資本を稼ぐ」の内容についての説明があれば可。〕

Ｃ＝３〔「新しさゆえに価値が生じ」の内容がなければ０。〕

Ｄ＝３〔「新たな経済圏の創出」「資本主義を拡大」の片方のみの場合は減点２。〕

問４　Ａ資本主義の加速する時間の流れに巻き込まれ、Ｂ前傾への強迫に駆られて待つことを拒む状態から、Ｃ予兆を感じて未知なるものを期待しながら待つことで、Ｄみずからの次の行為につなげていく能動的な状態に作り変えること。（100字）

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔単に「資本主義の時間」は減点１。「巻き込まれ」の意味合いがないものは０。〕

Ｂ＝３〔「前傾への強迫」は「先を見通すことが求められる」「前のめりの姿勢」などの表現も可。「待つことを拒む」の内容がなければ０。〕

Ｃ＝３〔「待つ」は必須。「予兆を感じて」「未知なるものを期待」は、いずれかのみは減点１。〕

Ｄ＝２〔「待つ」という行為の「能動的」「積極的」な面が書けていれば可。〕

問５　Ａ今の自分の理解を超えたものをいつか理解できると期待を抱く、Ｂ能動的な Ｃ待機の時間。（39字）

Ａ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝４

Ｂ＝２〔「積極的」「次なる行為へつなげる」なども可。〕

Ｃ＝４